

パトナムの实在論と真理の概念

大石 敏広 (Ohishi Toshihiro)

北里大学

外的世界の懐疑論は例えば、次のような懐疑論的論証として定式化できる。(1)私は、私が培養槽の中の脳でないことを知ることができる場合にのみ、私に手があることを知っている。(2)私は、私が培養槽の中の脳でないことを知ることができない。(3)それゆえ、私は、私に手があることを知らない。

知識の「文脈主義」によれば、前提(1)(2)は、懐疑論者による高いレベルの認識基準に基づいて主張されており、その文脈において真である。結論(3)は、同じく高いレベルの認識基準に基づいて主張されているなら真であるが、日常会話での低いレベルの認識基準に基づいて主張されているなら偽である。つまり、真理は文脈に相対的である。文脈主義者によれば、懐疑論的論証における結論(3)は低いレベルの認識基準に基づいて主張されると見なして、この懐疑論論証は妥当でないとして懐疑論を回避するという戦略をとることができる。

「文脈主義」の問題点は第一に、「文脈主義」では、言明の真理条件が、言明が発話される文脈によって変動し、言明の真理は発話の文脈に依存するということである。第二に、文脈主義者は、「文脈主義」が、私たちの日常言語における「知る」や「知識」という言葉の使用を反映していると考えているということである。

本発表では、この「文脈主義」を評価する準備段階として、ヒラリー・パトナムの实在論をめぐる議論に着目する。パトナムは、長年にわたって实在論との関わりの中で真理について論じてきており、自らの立場を、「形而上学的实在論」から「内的实在論」を経て「自然な实在論」へと変化させている。特に、「自然な实在論」は重要である。パトナムは、この「自然な实在論」を、「普通人の自然な实在論」あるいは「常識实在論」と言い換えている。つまり、「自然な实在論」は、私たちの日常言語の視点からの实在論であり、この实在論との関わりの中で真理についての考察がなされていると見ることができる。こうした点から、「文脈主義」について考察する前に、实在論と真理についてのパトナムの議論を参照することに意味があると考えられる。

本発表では、パトナムの实在論の変遷をたどりながら、パトナムが实在論を変化させていった動機と、この変遷において暗黙のうちに前提されている視点を明らかにする。それに基づいて、「自然な实在論」の問題点について論じ、日常言語の側面から真理について何が言えるのかを述べていきたい。